




# シャンダイア物語

～智慧の峰～

福田 弘生

Anima Solaris



## 第四章

# 母の歌

## 第四章 母の歌

学校のまわりでは雪が止んでいた。このところ晴れの日が多い。寒さの厳しい智恵の峰にも春が少しだけ近づいてきたのかもしれない。夕陽を浴びた三つの建物は心なしか暖かそうにさえ見えた。スハールは宿舎の二階にある自分の部屋の窓から、キラキラ光る雪とその中にわずかにくぼんだように見える、ふもとから学校に続く道をぼんやりと眺めていた。

(もうすぐこの道をブライスがやって来る。自分がこんな気持ちで窓の外を眺めるなんて一年前には思いもよらなかった)

ふと視線を上にあげたスハールは針葉樹の森のはるか彼方、学校より頂上寄りに建っている神殿の方角に黒いゆらめきがあるのに気がついた。やがてその黒いゆらめきは汚れた煙になってたちのぼった。激しい胸騒ぎを感じたスハールは急いで階下に降りたが、まだ気がついた者はいないようだった。スハールは通りかかった巫女達を呼び止めて、数名の者を従えて庭に出た。外に出た巫女達は、スハールの指さす神殿の方角をふり仰いで、真っ黒になった空に恐怖の声をあげた。スハールが学校付きの兵士を調べにやろうとしたその時、神殿から学校へと続く道のほうから、血だらけの神官がよるめきながら庭に走

り込んできた。そしてその数は、見る見る増えていった。

「ああ、何て」とでしよう」

スハラー達は駆け出していつて、倒れそうになっている神官達を助け起こした。

学校の施設の中で最も広い部屋が多い教会は、けが人の手当のために一時期騒然となった。だがたどり着いた神官達にはけがの程度が軽い者が多かった。ギルゾンとルフーの襲撃を直接受けた者はほとんどが死んでしまったのだ。神官達の手当が一段落する頃にはすっかり夜になっていた。一息ついたスハラーは神官長のエスタフが巫女の長サンザの部屋に向かうのを見て、その後を追った。

スハラーが部屋に入った時、年老いた巻物の守護者は椅子に座って真つ暗な窓の外を凝視していた。その手にはリラの巻物が握られている。隣に長い髭のエスタフがやつれきった沈痛な面持ちで立っていた。

「サンザ様、ギルゾンは」

サンザは顔を向けると険しい表情で答えた。

「スハラー、落ち着きなさい。もしギルゾンがここも襲うつもりならば、逃げてでも無駄だわ。無防備な山道で襲われるより、むしろ建物の中で抵抗したほうが良いでしょう。手があいている巫女達をあつめておきなさい」

「はい」

スハラーはチラッとエスタフに目をやったが、エスタフは

無言だった。スハラーはいかめしく恐い印象しか無かった。エスタフの打ちひしがれた姿に、この災いの深刻さを痛感した。スハラーが学校中を駆けまわって、手が空いた巫女達を宿舎のエントランスに集め終わった頃、屋外に狼の遠吠えが響いた。その声に引きずられるように見習いの若い巫女が恐怖の悲鳴をあげた。スハラーは急いで教会の最上階に戻り、年長の巫女達と一緒に自分で歩く事ができないサンザの輿をかついだ。

サンザの輿はゆっくりと教会から出た。すっかり暗くなった学校は、巫女と神官達がたいたかがり火で照らし出されている。闇は揺れる炎の明かりに切り取られ、なんとなくこじんまりとした空間が巫女達の目の前にあった。夜の冷たい風が乱れた事に気がついたスハラーが森の中に視線を向けると、その先の闇の中に狼達の光る目が点々と浮かび上がった。

サンザも、スハラーも息を殺して闇の中をみつめた。やがてその闇から溶け出すように小柄な男がかがり火のあかりの中に歩み出てきた。

「ギルゾン」

サンザが小さくあえいだ。黒い短剣の魔法使いギルゾンは雪の向こうに、やや体をかしげてじつとたたずんでいた。巫女達は命まで凍らされてしまいそうな恐怖に必死に耐えた。しかしやがてその黒い姿はフツとかき消す



ように闇に消えた。一同は大きく息を吐きだした。その時かがり火が大きくはせて、闇を切り裂く鋭い音に巫女と神官達は震え上がった。

エイトリ神の幻を見て、ただならぬ事態が起きた事を察知したセルダン達は、学校への道を懸命に急いだ。しかし雪山の行軍は辛く、寒さに不慣れな若者達の歩みは心ほどには進まなかった。そんな中でセルダンが驚いたのはブライスの変わり様だった。あれ程文句を言っていた男が、エイトリ神を見た日から一言の不平も言わず黙々と足を運ぶようになったのだ。真剣になったブライスは、本来の活躍の場である海を遠く離れた山の上においてさえ力強く頼もしく見えた。やがて疲れ切った一行の前方の、雪をかぶった針葉樹の向こうに尖った屋根の建物が三つつ見えてきた。セルダン達はエイトリ神の幻を見てから四日後に、ようやく学校にたどり着いた。

学校が見えたとみるや、それまで最後尾を黙々とついてきていたブライスは、先頭のセルダンを追い越して走り出した。セルダン達はビックリしてその後ろ姿を見送った。なだらかな坂になった道を駆け上がり、学校の庭に走り込んだ大男は、しかし似たような三つの建物の前でしばらくまごついていた。その時、ブライスが額にはめているエルディ神の銀の輪が一瞬キラリと光り、ハッと気

がついたブライスは弾かれたように右手の建物に走って行って大きな音をたてて入り口の扉を開いた。扉の向こうには、ふいをつかれたスーラが驚いた顔をして立っていた。ブライスは何も言わずに、背の高いやせ気味の巫女を抱きしめた。

セルダンはその光景を見て不思議そうにマルヴェスターにたずねた。

「今、ブライスの額の輪が光りましたよね」

マルヴェスターが苦笑いした。

「いつあれができるかと心配しておった。ザイマンの王子であるという事は、正しい道を見つけて皆を導くという事なのだよ」

「ブライスにはそんな力があつたんですか」

「まだ使いこなせておらんがな」

建物から続々と、巫女や神官達が出てきた。鋭い観察者でもあるベロフがまわりを見回した。

「ここに居るのは巫女と、護衛の兵士だけかと思いましたが」

マルヴェスターが答えた。

「神官達がここに居るといふ事は、神殿に何かがあつたという事だ。さて行くか」

カインザーのセルダン王子の後に、武術師範のベロフ男爵、元バルトルムスター、ロトフの家来であつた黒い衣

の大柄なアタルス、ポルタス、タスカル兄弟。そして翼の神の一番弟子マルヴェスターが続いた。集まってきた巫女や神官達は、初めて見るカインザーの戦士に威圧されたようにあどずさりした。しかしその目がすがるように救いを求めている事が、セルダンには痛いほどわかった。やがて一行を囲んだその人々の中から、威敵のある老人が進み出た。白い長髯が心なしかふるえている。セルダンはそれがエイトリ神の神官長エスタフだろうと思った。

「マルヴェスター、やられた。ギルゾンが神殿に来た」

マルヴェスターはすれ違うように体を寄せ、自分と似たような歳格好の老人の肩をたたいた。

「泣き虫のおぬしの神が泣いている姿を見たよ」

「あつという間だった。神殿中に狼があふれ、ギルゾンが黒い短剣をもって神殿を荒らし回った。何かを探しているようだったと、見た者は話している」

マルヴェスターはハッとしてたずねた。

「巻物は」

「無事だ。わしが持って逃れた。しかしギルゾンが巻物を求めていたのであれば、わしは生きていないだろう。事実、その後魔法使いは学校までやってきたが、興味が無さそうに去っていった」

「そうか。おそらくギルゾンは黒の魔法に関する何物かを探しているのだろう。まずはサンザに会おう」



セルダン久しぶりに敵が間近にいる事を感じて身震いした。ドラティヤゾノボートと戦った数ヶ月前の緊張感が戻ってきた。エスタフは先頭に立ってセルダン達一行をサンザの部屋に導き入れた。すでにブライスとスハラが中にいた。二人はしっかりと手を握り合っている。セルダンはサンザという巻物の守護者に初めて会ったが、普段は柔和であつたろうその顔は、何かふつ切れたような明るい表情をただよわせていた。マルヴェスターはまずエスタフに話しかけた。

「サルパートはこれまでの歴史の中で、様々な局面で有益なアドバイスをシャンドアアの国々にしてきてくれた。しかし力ある巻物を神殿から戦いの中に持ち出す事は無かった。どうやらその姿勢を変える時がきたと思つのだ」

エスタフはため息をつきながら答えた。

「異存は無い。今度こそはどうかしなければならん。イトリ神の神殿まで黒い魔法使いに蹂躪されてしまうと。我々の不覚であつた」

エスタフは思ひのほか協力的だつた。マルヴェスターは続けた。

「サンザ。巻物の守護者の地位をスハラに譲る準備はできているか」

「もちろんよマルヴェスター」

これにはさすがにエスタフが驚いて反対した。

「しかし、しかし、守護者は終生だ。変える事はできない」  
「それを変えるんだ」

マルヴェスターがピシャリと言った。サンザがその後を続けた。

「変えなければギルゾンに勝てないわ。私は一人では歩けません。でも輿に乗ってではギルゾンの動きについていけません」

エスタフはみるからに取り乱していた。

「どっつするんだ。何をするつもりなんだ」

「するつもりではない、おぬしがするのでエスタフ。わかっているだろう、三千年前におぬしらが頼んだ事と反対の事をエイトリ神にお願いするのだ」

「わしがか。わしの代で三千年の慣習を変えてしまうのか」

「そつだ」

「おお、何という事だ」

エスタフは嘆いて、考えさせてくれと言いながら部屋を出ていった。セルダンはこの期に及んでも迷っている神官の頭の硬さに心配になった

「大丈夫でしょうかマルヴェスター様」

「他に方法は無い。神官達もわかってくれよう」

その日の夕暮れ、スハーラはブライスを連れ出して一

緒に学校の裏道を歩いた。冷たい空気の中、細い体を大きなブライスに寄り添わせるようにしてスハラーは歩いた。そうすると体中にぬくもりがひろがり心強さが増してきた。

学校から少し道を下った先には小さな小屋があつて、その入り口にある止まり木にはふくろうがとまっていた。その目が明るく光っているのを知って大男がちょっと驚いたように立ち止まった。しかしスハラーは嬉しそうにふくろうのとまっている枝にゆっくりと近づいていった。ブライスは憮然として眺めている。

「翼の神の一番弟子のマルヴェスターのいる所では言えないが、ザイマンの人間は南の将の鳥にいつもひどいめに会っているせいか、どうにも鳥が好きになれんだ」

スハラーは時折見せるいたずらっぽい目で、ブライスにニヤリとした。

「サルパートのふくろうは知恵の象徴なのよ。この賢い鳥は私の友人ですの。離れている間は寂しかったわ」

だがそう言いながらスハラーはふくろうを森に飛ばした。

「やめじちうへ」

小屋の小さな窓越しに見える部屋の中にはすでに火が炊かれていた。そして二人は暖かい小屋の中に入っていた。

翌日、朝食の前にエスタフは神官一同を代表してサンザからスハーラへの、巻物の守護者の継承を承諾する事を告げた。そしてそのまま一同は教会の祭壇の前に集まった。巫女や神官の主立った者達もすべて集合した。厳粛な空気が支配する中、エスタフが祭壇に進み出てエイトリ神に祈った。その後、年長の巫女達がサンザの座った椅子を持って進み出た。サンザは巻物を胸に抱いて一心に祈りをささげた。セルダンは過去に何度か神を迎えるときに感じた静謐な空気の心地よさに見をまかせた。やがてサンザが顔をあげたが、その顔は一気に老け込んだように焦燥していた。

「エイトリ神がお答えにならない」

横にいたエスタフが絶望的に声をあげた。

「やはりダメなんだ。エイトリ神が継承をお認めにならないんだ。巻物はサンザに託すしかないのだ」

しかし後ろに控えていたザイマンの王子ブライスがその声をさえぎった。

「エイトリ神が姿を見せなくても、冠の守護者とその神が守護者の交替を宣言するぞ」

エスタフはエイトリ神が答えなかった事に力を得て反論した。

「そんな馬鹿な事があるか、巻物はエイトリ神の守護物

だ」

「だけど、エイトリ神もザイマンのエルディ神も、同じアイシム神の力を分け合った兄妹神でしょう」

カインザーのセルダン王子もそう言って進み出た。

「剣の守護者とクライドン神も、スハールさんへの守護者の交替を指示します」

スハールは意を決してサンザの前に進み出た。サンザは涙に頬を濡らしながら巻物をスハールに渡した。

「あなたには素晴らしい力添えがいるのね」

スハールは厳肅な面持ちで巻物を受け取ると、振り返って皆に宣言した。

「我々は進まなければなりません。狼からこの国を救い、シャンダイアに再び王を迎える日まで」

皆が部屋に戻ると、セルダンと同じ部屋をあてがわれていた、アタルス達兄弟の末弟のタスカルが待っていた。

「ベリック王からの伝言が届きました」

セルダンは驚いた。セルダンと一緒にだったアタルスがいかつい顔をゆがめて笑った。

「逃げてきた神殿の給仕の一人がバルトルの手のものでした。私達にしかわからなかったでしょう」

「何と言ってきたんだ」

「ふくろの紋章の小瓶を、サシ・カシユウが持っているか

もしれないとお言っています」

「よし、ベロフ。みんなを呼び戻してくれ」

再びサンザの部屋に一同が集まった。セルダンがベリックの伝言を皆に告げた。

「スハーラさん。ベリックからの報告で、ルドニアの霊薬が見つかったかもしれないのです。吟遊詩人のサシ・カシユウが持っている可能性が高くなりました」

皆がホウという声をあげた。セルダンは続けた。

「もし霊薬が手に入ったとして、どうすれば狼ルフィーをギルゾンの手から解放できるのですか」

スハーラが一同を見回して説明した。

「サンザ様と私達ですつと調べていたのです。そして何とかできそうな方法を考え出しました。巻物と、巫女達の祈りの力で霊薬を気体にします。おそらく煙のようなものになるでしょう。祈りにはほぼすべての巫女の力が必要です」

「それは難しいですね。狼達をどこかにまとめて、しかも煙をゆきわたらせなければならぬ。おびき出すのはむずかしいとマキア王も言っていました」

「挑戦だ。マキア王よりギルゾンに戦意をわかせる者が挑戦状をつきつけるんだ」

唐突にブライスが言い放った。セルダンは驚いた。



「挑戦。だれがするの」

ブライスがマルヴェスターを見やった。マルヴェスターはちょっと嬉しそうに答えた。

「挑戦はいい案かもしれん。しかしギルズンは狂っているが馬鹿ではないぞ。現段階でわしと正面から戦うはずがない」

「ならば冠の守護者の俺がやる」

セルダンが控えめに言葉をはさんだ。

「いや、それは僕の役割だと思つ。戦うのならば剣を持つ僕のほうがいい」

ブライスはちょっと悔しそうな顔をした。

「場所も決めないといけませんね」

サンザが言った。

「遠いのですが、私が若い頃通つた道が、谷の中央を走っていました。あそこの谷の奥ならば狼達にまとめてルドニアの霊薬をかける事ができるでしょう」

「どうです」

「牙の道」

そう言うとサンザはテーブルの上の地図を指さした。セルダンは目を見開いた。

「北の将の要塞の真ん前じゃないですか」

セルダンの後から地図を見たベロフは嬉しそうだった。

「それが挑戦というものですぞ。まさしくカインザーの

王子にふさわしい行為です。私と抜刀隊がお共いたします」

まだ不満げなエスタフがおずおずと文句を言った。

「まず、ルドニアの霊薬を手に入れなければならぬだろう。それはどこで手に入るんだ」

「もはやベリックにまかせるしかないな」

マルヴェスターがあつさり答えた。エスタフは驚いた。

「おい、子供にそんな大切な事をまかせてしまうのか。霊薬を探し出して、しかも我々が必要な時に、必要な場所に届けなければならぬのだぞ」

「ベリックは信用してよい。若いが、現在のシャンダイアの貴顕の中では最も信頼できる者だ」

セルダンとブライスは顔を見合わせた。マルヴェスターはニヤリとして続けた。

「ベリック本人はカインザーのセスタにいるが、配下の者がしつかりと届けてくれるはずだ」

サンザは心配そうだった。

「巫女達をどうやってそこまで導くのですか。雪道で北の将の軍やギルゾンの狼にみつかったら全滅させられてしまいます」

苦しそうな顔をして、エスタフが部屋の中を歩き出した。ブライスがその姿を見て声をかけた。

「どうしたエスタフ。心当たりがあるのか」

立ち止まってふりむいたエスタフの顔は真っ赤だった。

「どっついてもと言うのなら心当たりがある。だが、おそらくこの道に行くのは無理だ」

「なぜわかる」

「まだ誰も通り抜けた者がいないと言われているのだ。アントワの町の東、ジンネマンの大洞窟の先が牙の道につながっているという伝説がある」

ブライスは嬉しそうだった。

「誰も通り抜けた者がいないのに、その先がわかるものか。おそらく誰かが大昔に通り抜けて伝説を残したんだ」

「深い洞窟だ。もし先が牙の道に繋がっているとすると、闇の中を何日も行軍しなければならぬだろう」

「行ってみよう」

マルヴェスターが決めた。

「ジンネマンにはわしも入った事が無い。しかしもはや時間がない。このままギルゾンに野放しにしておくわけにはいかんのだ。たとえ霊薬が無くても牙の道で一戦やってみるしかあるまい。わしとスハーラ、ブライスは、巫女達を連れてふもとの安全な道を選んで洞窟へ向かおう。アタルス、ベリックの手の者にジンネマンの洞窟の入り口に一か月後に霊薬を届けるように伝えてくれ。セルダン」

「僕はギルゾンへの挑戦状を書いてから、まずアントワに行きましよう。そこでベロフの抜刀隊と合流して牙の道

に向かいます」

「地上を、堂々とです」

ベロフが言い添えた。ブライスがちよつと心細そうにぼやいた。

「山の次は洞窟か。どんどん俺の嫌いな世界に向かっていくなあ」

しかしスハーラがにらむと、ブライスはテレ臭そうに笑った。セルダンは友人にいつもの不平が戻ってきた事にホツとした。

翌日、セルダン、ベロフ、アタルス達三兄弟はさつそく学校を後にした。巫女達は準備が整い次第、マルヴェスター達が引き連れてジンネマンの洞窟に向かう事になっている。出発には皆が見送りに出ていた。

「それでは一か月後、僕とベロフは牙の道に。マルヴェスター様達はジンネマンの洞窟に。マルヴェスター様、洞窟を抜けたらすぐに連絡をくださいね」

「ああ。洞窟を抜けてからの事を考えると、洞窟に馬を入れる事ができればいいんだが」

ベロフが首を振った。

「それは難しいでしょう。短い時間ならともかく何日も暗闇を歩かせるのは無理です。いなないたり、暴れたりして敵に感づかれてしまつては何もなりません」

「そっだなあ。そのあたりは洞窟へ向かう道すがら考えてみるとしよう。挑戦状はどうした」

セルダンが答えた

「今朝がた、伝令鳥に持たせてブンデンバート城に送りました。マキア王もネイランから城に戻られるようですよ、王の元から北の将の要塞に届けてもらう事にします」「よう。ではたうじやで」

セルダン達は雪道を神殿に向けて出発した。神殿からアントワに向けて山を降りる道が続いているのだ。その日の昼前、ギルゾンの黒い炎で焼け落ちた神殿を通り過ぎる時、セルダンは聖なるカンゼルの剣に誓った。必ず黒い短剣の魔法使いを倒すと。

かつてカインザー南部の山岳地帯を荒らし回った盗賊の頭バンドンは、どういう運命のいたずらか現在はカインザーで最も勇敢と言われるクライバー男爵の顧問のよくな地位に就いていた。しかしソントール領に侵攻した軍に従軍している現在、バンドンは不平のかたまりになっていた。

ロツティ、クライバーの軍は気楽とでも言ってい程の軽快さで、北の将の軍を蹴散らしていたが。背後の補給路は全く寂しいかぎりだった。この軍の補給と情報収集は、今では事実上バンドンがすべて取り仕切っている。□

ツティの騎馬部隊も、クライバーの軍も規律が良かったので、住民のひどい反抗を引き起こす事も無くここまで進軍してきていたが、このままでは間違いなくゆきづまるだろう。

バンドンは三万の軍の最後方に、配下の元盗賊達と共に進んでいた。クライバーを通してオルドン王に頼み込んだのだ。いざという時にはこの者達しか信用しないとバンドンは心に決めていた。その盗賊の一人がのんきそうに無遠慮な声をあげた。

「おかしら、西に見えるのはサルパートの山ですよね」

「ああ、そうだ」

「夜にでもあそこに逃げ込みましょうぜ。カインザーの將軍なんぞに付き合ったら、命が幾つあっても足んねえ」

「俺もそうしたい所だが、あの山の中にもあお宝はねえ。ギルゾンって狂った魔法使いの狼だけだそうだ」

「そいつは割に合わねえ」

バンドンはニヤリとした。いい事を思いついたのだ。

「どうせ逃げ込むならソントールの山脈まで行ってそっちに逃げこもう。ソントールはカインザーみてえな辺境とは違う。グラン・エルバ・ソントールに近づけば、宝石や金を満載した商人や貴族達の馬車が道から溢れそうに走っているから」



「そいつはいいや。行きましようぜ」

「ああ」

そう言っただバンドンは元盗賊達と大笑いした。そこに情報収集に偵察に出していた部下が戻ってきた。

「おかしら。大事な情報があります」

「よし」

そう言っただバンドンは馬の速度をあげた。そして情報を持ってきた部下と並びながら隊列の外を走って先頭に向かった。走りながら報告を聞いたバンドンは、ロツティとクライバーの姿を探して一人隊列の中に走り込んでいった。

その日もカインザーの二人の貴族はのんびりと軍の先頭にたつて馬を進ませていた。サルパートの峰の西側と違ってこちらは天候が良い。熱く乾燥したカインザーに比べればずっと涼しい事は確かだが、馬達のためにはむしろ良い気候だった。そこにバンドンが、仕入れたばかりの情報を持って追いついた。

「ロツティ、クライバー、ついにソントールの本国が動いた。北の将への援軍が来るぞ」

馬の上でロツティが器用に体をゆすりながら嬉しそうに笑い声をあげた。

「ついに来るか」

そして片手を上げると、全軍を止めて休止を命じた。

「さてと、これで第一段階が終わりだ」

バンドンは不信げに問い返した。

「何だと」

ロツティは起用に馬をくるりと回して答えた。

「どっせソントールの援軍がくるのならば、なるべく早く引つ張り出したかったのさ。援軍はいつぐらいにやってくる」

「それでこんなに無謀にソントールに深入りしたのか。俺の苦労も考えてくれやい、ちくしょう。ソントールの援軍が来るまで一か月といったところだ」

「一か月か。さすがにソントール大陸は広いな。俺達がいまいるのはどのあたりだ」

「まだ北の將の要塞までの半分も来てない。もうちょいと行くと山脈が東に張り出すが、ちょうどそのあたりが半分だ」

「ここで、青の要塞の議論に戻るな。砦をどこつくるか」

バンドンは爆発寸前だった。

「気が狂ったのか子爵。ソントールのご真ん中だぞ。退却するんだ、時間は充分にあるんだから、補給が可能で、カイト・ベーレンスや怪物のトルソンが救援に追いつける距離に戻れ」

ロツティはしばらくポツンと馬の上で考えていたが、ふとサルパートの山脈に目を向けて微笑んだ。

「だが俺達が背にしているのは、盟友のサルパートの峰だ」  
「そこからの補給は細い。ましてや援軍など来やしない。  
この大軍を守れると思うのか」

「北の将の軍は相手にならん。ソントールの援軍がどの程度強いかによるな」

それを聞いたバンドンも少し考えた。

(確かにこの軍は強い)

「援軍が弱い事を期待しないほうがいいが、ソントールの本隊はセントーン攻めに向かっている。それ程の軍は来るまい」

「ならば、数によっては互角以上に戦えるかもしれん。待ちつけるか」

それまで年長の二人の議論を黙って聞いていたクライバーが言った。

「さっき、サルパートの峰が東に張り出していると言ったな」

「ああ」

「その先はどのくらい張り出してるんだ」

「もちろん俺自身は見たことが無いが、地図や地元の話者を総合すると、ちょうど向かい側にソントールの大山脈の西の端があって、ソントール平原の一番狭い所になるようだ」

「そこだ。そこならば、ソントールの軍が我々を無視して

通り過ぎる事はできない。町か村はその辺にあるのか」

「村だ。サムサラの村がある」

ロツティとクライバーは顔を見合わせた。ロツティが言った

「サムサラに砦を築こう。背後のサルパートからの補給ができるようにサルパートに滞在しているアシュアンに連絡を入れてくれ」

バンドンは顔を天を仰いで、両方の手の平で顔を覆った。

二千五百年の時を経て帰還したバルトールの少年王、聖なるバザの短剣の守護者ベリックは、風のように走る栗毛の馬の背で踊るように体を弾ませていた。付き従うのはバルトールの地下商人フスツと、フスツが選んだ精鋭の部下四人。すでにポイントポートを抜け、智慧の峰の南部に入っている。ベリックはサシ・カシュウやマスター、モントと同じサルパート山脈の東の街道を通っている。

すでにこのあたりはロツティ達の通った後で、カインザーの兵士達が町などの要所ごとに駐屯している。ベリックはバンドンの悩みなど知らなかったが、実はバンドンが心配している程ロツティとクライバーの背後は寂しくなかった。周到的なカイト・ベーレンスが少しずつではあるが兵力を北にのばしていたのである。

ベリックはポイントポートの築城風景も通り抜ける際に観察してきたが、カイトの造ろうとしている城のつくりはとても手堅いように見受けられた。トルソンの最強軍団とともに戦えば、とうぶん落ちる心配は無いだろう。カインザーは得難い人物を大事な時期に起用できるという幸運をつかんでいた。後ろを走っていたフスツが馬を寄せてきて、王に短く用件を伝えた。

「一か月後、ジンネマンの大洞窟」

ベリックはチラツとほほ笑みを見せて、さらに馬を急がせた。

サルパートの吟遊詩人サシ・カシュウはバルトールマスタ、モントに連れられて、智慧の峰のサルパート側、アントワの町にあるらしいモントの本拠地に向かっていた。サルパート越えの山道は北の将の兵、ギルゾンと狼、さらには山賊達等、数々の危険に満ちていたが、バルトールマスタを取り巻く男たちには微塵の恐怖も感じられなかった。事実サシはこれ程安心して旅するのは久々である事に気がついていて。しかしまわりの者たちにスキが無いぶん、脱出の機会を得るのが難しい事もわかってきていた。

その日、モントの一行は智慧の峰の北部中腹にある、川の近くで休んでいた。夕暮れにはまだ間があったが、

人気の無い山の中はさすがに寂しく、寒気が強いいため鳥の姿すらも無かった。バルトール人の一行は思い思いに腰を降ろして、ゆっくりとお茶を飲み体を休めた。この休養の間隔も実に的確に指示されている事にサシは感心した。もしバルトールがベリック王の元に結束すれば、極めて有能な軍隊ができあがるだろう。

お茶を飲みながら、何とか脱出の機会を得たいと思案をしていたサシは、その時かすかな歌声を耳にした。耳をそばだてるサシの後ろから、モントが近づいてきて声をかけた。一見、人の良い老人に見えるこの男もおそろしく強靱な体力をもっている事をこの数日の旅でサシは知っている。

「女の歌声だな」

サシは手をあげてモントを遮り、しばらくして大きなあえぎをもらした。その顔が蒼白になっていくのに横に立ったモントは気がついた。

「おお、おお、アリアの声だ、妹の声だ。」

モントは驚いた。

「妹を探しているおまえの噂は知っているが、そんなに簡単に妹の声がわかるのか」

サシはキツとしてモントのほうに顔を向けた。

「俺は吟遊詩人だぞ。声と歌を聞き分けるなどたやすい事。あの声、あの歌。間違いない。探してくれモント、連



れてきてくれ」

モントはすぐに了解した。この吟遊詩人に大きな興味を持つようになったのだ。

「わかった。待っている」

そう言つてモントは数人の手下を連れてみずから声の主を探しに行った。すぐにモントの残りの部下がサシのまわりに陣取つて、サシの監視にあたる。サシは笑つた。

「心配するな。あれは妹の声に間違いない、俺が今逃げるわけが無いではないか」

それからしばらくして、モント達が戻ってきた気配がした。サシは足音に聞きなれない音を聞き取り、モントが歌の主を連れて来た事を知つた。

「連れてきてくれたんだな」

「ああ、しかし」

サシ・カシウはフラフラと立ち上がった。突然風が吹いた。そして空が曇り、あたりが薄暗くなった。モントは驚いてまわりを見回した。

「これはどうしたんだ」

まぶたに感じる光が弱くなった事に気がついたサシが答えた。

「エイトリ神のご配慮だ。しかし我が目はエイトリ神によって守られているはずだ。噂通り用心深い神よ」

そう言つとサシは、八年間閉じていたまぶたを開いた。

八年ぶりに光をとらえた吟遊詩人の目の前には、汚れた服を身にまとい、水を汲む桶を下げた少女が立っていた。がく然とするサシを見ながら、モントが少女の肩に手を置いてうながした。

「名前を言っておあげ」

「エレージェ」

「おかあさんの名前は」

「アリア」

サシはぼう然としている。モントは続けた。

「君はいくつ」

「七つ」

「おかあさんは今、どうしている」

少女は突然思い出したように泣き出した。

「三年前に死んだの。おとうさんにいじめられて死んだの」

それを聞いたサシは、突然頭をかかえて絶叫した。その時、サシの叫び声に引き寄せられるように、まわりの森から一団の男達があらわれてモント達を囲んだ。山賊の一味らしい。そして荒くれた男達の中から首領らしき男が進み出た。

「俺の娘を返してもらおうか」

キツとした目を向けたサシは、その男に向かって鋭く

たずねた。

「この子の母をどうした」

山賊の首領はせせら笑いながら答えた。

「死んだ、死んだ。北の将の兵士達にもらった女で。叩く  
といい声で泣いたが、病気になるって働かなくなったので山  
に放り出したら死んじまった」

サシはスツと目をつぶった。モントはその姿に凄まじい  
殺意を感じてゾツとした。次の瞬間、目をつぶったサシは  
ブーツから細い針のようなものを引きだすと、何も言わ  
ずに山賊の首領に走り寄った。誰もが目を疑った次の瞬  
間、鋭い針の首への一刺しで山賊の首領は死んだ。モン  
トの横でエレーデが呆けたようにその光景を見つめてい  
る。一瞬の後、やっと自分達のリーダーが殺された事に  
気がついた山賊の部下達は、大騒ぎでサシ・カシュウに襲  
いかかるうとした。それを見たモントが一喝した。

「静まれ。我が名はマスター、モント。バルトールのベリッ  
ク王からサルパートを預かるバルトールマスターである。  
その男に手を出すな。我が言葉に刃向かう者は命が無い  
と思え」

バルトールマスターの言葉にひるんだ山賊の一団は、し  
ばらく遠巻きにしてサシをにらんでいたが、突然くるり  
と後ろを向いて森の中に姿を消した。サシはがっくりと  
膝をついた。しばしの沈黙が降りた。

その沈黙を破ったのは、エレーデと名乗った娘だった。娘は山賊の首領の亡きがらに走り寄ると、その腰のさやから短剣を引き抜いて、ぼう然としているサシ・カシュウに切りかかった。サシは抵抗しなかった。あわてたモントの部下が駆けつけて二人を引き離れた時、吟遊詩人は肩に傷を負っていた。サシ・カシュウは自分の腕に流れる血をしばらくぼんやりと見ていた。

エレーデは自分を取りおさえたモントの手下の手を振り払うと、泣きながら父親の遺骸にすがりついた。モントは悲しげな目でサシ・カシュウに話しかけた。

「こんな男でも娘にとっては大した一人の父親だったのだ。少しは優しい所もあったのかもしれない。サシ・カシュウ、復讐とはこういうものだ」

サシは顔を覆ってすすり泣いた。しばらく伯父と姪の泣き声が森に流れた。

やがて吟遊詩人は両手の間から、その美しい声でつぶやくように歌いだした。モントとその手下達は徐々に明瞭になっていくその歌の美しさに心を奪われた。しばらく父の亡きがらにすがって歌を聞いていたエレーデが、その歌声を聞いてゆっくりと顔をあげた。その小さな顔には驚いたような表情が貼り付いている。そして山賊の娘は次の瞬間に、サシ・カシュウにむかって走りよってその胸に飛び込んだ。エレーデは今度は両腕で男を強く抱き

しめて叫んだ。

「かあさん」

人生経験が豊富なモントでさえ、その二人の姿を見た時には流れ出す涙をこらえる事が出来なかった。サシの歌っていた歌は、おそらくカシウ兄妹しか知らない歌だったのだろう。暗い空の下で母の歌を思い出した娘は泣き、カシウは妹の死と自分の復讐の罪の深さに泣いた。

その夜。

たき火の明かりが強弱をつけて、座っているサシとモントの顔を交互に照らしていた。他の者達はすでに防寒対策を施したテントに入っている。モントはまぶしそうに炎を見つめるサシ・カシウの横顔を見つめた。細い顔に埋め込まれたような瞳は恐ろしい程に黒く深い。閉じ続けた八年の間にすべての光を失ってしまったようだ。

（この男は仕事で客に笑う時以外に笑った事が無いに違いない）

モントはたき火に乾いた木の枝を放った。

「これからどうする」

サシは吐き出すように言った。

「妹はもういない。八年間の俺の旅は終わった。だが、妹を殺した北の将の軍はまだ北にいる」

モントはこの答えを予期していた。

「やめておけ。おぬしの妹の娘はどつする」

サシはモントに顔を向け、真剣な瞳で見つめた。

「むしのいい話だと思うが、エレーデを頼む。どこか安全な所に預けてくれ。俺が持っている金ならばすべてやる」  
「う」

「金などいらん。バルトールの民は決して子供を見捨てたりはしない」

サシは続けた。

「もう一つ頼みがある。俺を解放してくれ。妹の命を北の将ライバーの命で償わせてやる」

モントはこれも予期していた。サシという男はそういう男だ。

「エレーデの件は良い。だが貴様を解放するわけにはいかない。ベリック王のご命令だ」

「王が欲しいのは俺の身柄ではない」

そう言つとサシは愛馬に近寄つて鞍の帯の中の隠し袋から小さくて平たい瓶を取り出した。サシの、年齢よりはるかに年老いたように見える皺だらけの手の中に掴まれた小瓶には、ふくろつこの紋章が刻まれていた。

「ルトニアの靈薬と呼ばれるものらしい。俺はこれをロツグのマスター、マサズの配下のイサシに渡す事になっていた。それと引き換えに妹に関する情報を聞く事になっていたのだ」



モントは目をすがめた。この謎の男の行動の核心に入ってきた。

「誰に頼まれたんだ」

「ザイマンのマスター、メソル」

「やはりな。どうやらメソルは王を敵と決めたらしいな」

サシはバルツール内の争いには興味が無いらしかった。

「これを置いていく。だから俺を解放してくれ」

「ライバーにどうやって近づく」

「イサシが要塞にいる」

「しかし、ルドニアの霊薬を持っていなければイサシは許すまい。イサシはバルツール内で最も警戒すべき男の一人だ」

サシは何も言わずに瓶をモントに渡した。

「せめて一晩、姪と一緒にいてやらんか」

吟遊詩人サシ・カシユウは笑って答えた。

「人の温もりが恐ろしい。俺の心を壊してしまっ」

そして、愛馬を引きながら闇の中に消えていった。モントは追わなかった。これ程悲しい心を持った男を呼び止める言葉は、さすがのモントにも無かったのだ。

## 著者紹介

福田 弘生 (Fukuda Hiroo)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/h-fukuda.html>

## 作品紹介

[http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel\\_1/chandaia/index.shtml](http://www.sf-fantasy.com/magazine/next/novel_1/chandaia/index.shtml)

ちえのみね

## 智慧の峰 - シャンダイア物語 -

---

---

2000年3月1日 第1版第1刷発行

著者 福田 弘生 (Hiroo Fukuda)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

---

---

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。  
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。